

---

# 鳥かごの小鳥

春秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥かごの小鳥

### 【Nコード】

N7670R

### 【作者名】

春秋

### 【あらすじ】

かつて此処とは違う、別の世界で育った私は、いつのまにかこの国に生まれ変わっていた。

それでも、優しい両親に愛されて私は穏やかな日々を過ごすはずだった。

あの日までは。

## 捕われる（前書き）

リハビリを兼ねて書きました。

私の作品としては、いささか系統が違います。

狂愛な描写がそのうち書かれますので、お気を付け下さい。

## 捕われる

「ユーリ、これとこれ！」

「はいはい！」

出来上がったばかりの熱々の料理からは、すきつ腹を刺激するいい香りが湯気とともに立ち上がっている。

父さんと母さんが作った自慢の料理をつまみ食いたい気持ちを抑えて、パタパタと足早にけれど埃を立てずにお客様の所まで運ぶ。

「お待ちせしました！野菜炒めとカツナの香草焼きです。あつ、こつちのお皿はお下げしていいですか？」

「ユーリちゃん、こつちにリタ八酒三人分追加ね」

「はい！」

パタパタと空腹も忘れて走り回っていれば、あつという間に閉店時間となる。

食堂の掃除をして、明かりを落とせば、無事の仕事はおしまいだ。

「疲れた〜」

食堂の2階にある自分のベッドにぱたんと倒れ込む。

母さんの賄いを食べてくうくと空腹を訴えていたお腹も今は満ち足りていて、疲れきった体は眠るよう促す。

けれど、私は中々寝付けない。

たまに、体がどんなに疲れきっていても私は寝付けなくなる時がある。

そんな時、思い出すのは前世のこと。

そう、私にはいわゆる前世の記憶がある。  
もちろん、誰にも話したことはないけれど。

私は、前世ここ、カルトナ国とは違う世界、地球の日本に住んでいた。

そこでの名は、唐島優璃。

それなりに裕福な家庭に生まれたけれど、それに比例するように両親は仕事に忙しくて中々一緒に過ごすことは出来なかった。

両親が、私を愛してくれることは知っていたけど。

それでも、寂しさを拭い去ることは出来なかった。

それが変わったのは、私が5歳の時。

私に、弟が出来たのだ。

平凡な容姿の私とは違い、綺麗な漆黒の髪と瞳を持った弟は実に可愛らしかった。

お母さんは、弟が生まれる前後に約1年の休暇を取ったから一緒に過ごせることも嬉しかった。

お母さんが仕事に戻ってからは、私は出来る限り弟……彼方の世話を見ようと頑張った。

まあ、小さな私に出来ることは少なかったのだけれど。

それでも、毎日飽きることなく彼方を見ていたし、彼方が最初に名前を呼んだのが私だったのは嬉しかった。

さて、可愛い可愛い彼方だったが、天は彼に二物も三物も与えていたことが成長していく中で判明した。

まずは、容姿。

生まれた時から可愛い顔立ちだったが、成長してから更に可

愛らしく、そして格好よくなっていた。

優しい少女めいた顔立ちに、すらりとした体はまだ幼さが残っていてそれが庇護欲を掻き立てさせた。

耳に心地好いやや高めの声で名前を呼ばれば、誰も彼もがあっさりと陥落していった。

将来が楽しみだと、誰もが賛辞した。

それから、頭脳と運動神経。

幼かった彼方は、私に良く懐いていて宿題をしようとすれば、横に張り付いていた。

始めの頃は可愛らしいと思っていたのだが、ある日彼方に間違いを指摘された日には冗談抜きで腰が抜けた。

何せ、まだ幼稚園にも入って居なかった彼方が小学校の問題を解いたのだ。

元々、賢い子だとは思っていたのだが、比較対象がなかった故にどれ程の者なのか分かっていなかった。

両親が彼方に会つのも、大抵は夜遅く寝ている時だったから気付かなかったのだろう。

それから、みるみる間に彼方は知識を吸収し、あっという間に天才の称号を手に入れた。

幼い彼方であつたが、彼に敵う相手など大人の中にさえあまり居なかった。

それだけ優れていれば、要らぬ嫉妬や憎しみも買つものだが、彼方は天使の様に愛らしい容姿や巧みな言葉を上手く使いむやみやたらに恨まれるような下手な真似はしなかった。

彼に人を引き付けるカリスマ性が、存分に備わっていたせいもあったのだろう。

正直に言おう。私は、彼方に嫉妬したし、憎んだりもした。けれど、やっぱり彼方は弟なのだ。

誰よりも可愛い私の唯一の。

誰にも一線を引いていた彼方が、自分にだけは甘えてくれるのを知っていてなお、彼を憎めるはずなかった。

散々悩んだりもしたが、最終的に優秀な弟を誇らしく思えるまでになった。

と、当時はそう思っていた。

確かに大部分は、そうだった。

けれど、情けない事にあの頃の私は幼い彼方に少し依存してる部分もあつたのだと今は思う。

誰も彼もが彼方しかみておらず、私はないものの扱い若しくは、彼方に近付くための道具としか見られていなかった。

そんな中で、彼方だけが私を見てくれたから、彼の中に私の居るべき場所を見出だしていたのだ。

彼方には、申し訳なかったと思う。

純粹に姉として慕ってくれた彼の思いを利用していたのだから。

私が居なくなつてから、彼はどうなったのだろうか。

幸せになっていればいいのだけど。

今、この世界でユーリとなって彼方から離れた事で、私は純粹に彼方の幸せを祈ることが出来た。

つらつらと彼方との日々を思い出している内に、やがて私が優璃として生きていた最後の日に思い至る。

あの日は、実に気持ちのいい晴れた過ごしやすい休日だった。

彼方と二人だけで、ぬるま湯に浸かるような穏やかな時間だった。

モテる彼方が羨ましくて、高校生になっても彼氏が出来ないことを嘆いていた気がする。

小学生に愚痴る高校生は、みつともなかったかも。

それでも、愚痴る私に彼方は優しくった。

「姉さんの魅力に気付いてない男に見る目がないんだよ。僕が姉さんと同じ年だったら、絶対付き合うのに」

と、まじまじと私を見て真剣に言う彼方が可愛い過ぎて思わず彼に抱き着いてしまったものだ。

どれだけ優れていても、彼方はまだ小学生にしか過ぎず、抱きしめた体は小さかった。

あの温もりは、今もこの腕に懐かしさと共に蘇る。

彼方もぎゅっと私を抱きしめてくれた。

まだ、小さい彼方だから腕が回りきらず、抱き着くという方が近かったけれど。

しばらくして、腕を離れた後も彼方は私から離れなかった。

それからしばらく、私の膝の上で私には全く分からない物理の本を読む彼方の髪を弄りながら時間を過ごした。

彼方は、わりとスキンシップを好む所があって、家にいる時は大抵私の近くにいた。

時々だけど、夜一緒に眠ることもあった。

そんな彼方の子供らしい所が実に可愛いくて、ついつい私も甘やかしてしまった。



そんなよくある一日を過ごして、もう少ししたら寝ようかとなったとき、彼方は一緒に寝ようとねだってきた。

二つ返事で了承した私に彼方が差し出したのは、甘いミルクティー。器用にそつなくなんでもこなす彼方だが、唯一何故か料理だけは苦手だった。

だけど、変わりにというか紅茶を煎れるのは上手くて、彼方の紅茶は私の好物の一つだった。

飲み干したそれは、いつもとはほんの少しだけ違う気がしたけれど、いつも通り美味しくてすぐに忘れた。

それから、私のベットで二人仲良く眠った。

そして、気がつけば私はユーリと呼ばれていた。

私に持病はなく、健康体だったはずで何故そうなったのか分からずしばらくは途方にくれた。

けれど、私を父さんと母さんが可愛がってくれたから、優璃が死んだことをなんとか受け入れ、この世界で生きようと思えるようになった。

それでも、まだ小さかった頃は、眠ったらまた知らない間に死んでしまうのではないかと怖くて中々眠れずよく泣いた。

その度に両親は私を抱きしめ慰めてくれた。

前世では、縁遠かった両親の愛を一身に受けれたのは、幸せなことだったと思う。

だから、将来は沢山の孫を二人に見せて、前世の両親に孝行出来なかった分も含めて返そうと決めている。

そこまで思つて、ようやく私は寝付くことが出来た。

翌朝、日が昇るのと同時に起きた私は眠い目をこすりこすり着替えと洗面をすまし、一階にある食堂の外に出る。

ほうきとちり取りで前の道路を掃除し、花壇に水やりをすればようやく目が覚める。

昨日、中々寝付けなかったせいで体は少し怠いが、それを振り払うように体を動かす。

ふと、顔を上げた私の目に映るのは朝もやに浮かぶように存在するお城。

城下街であるこの街の何処から見れる美麗なそのお城が、私には気になつて仕方がなかった。

なんといえ、いいのだろうか。

小さな頃から無意識にお城を見上げるのだが、何だかお城が怖くて仕方がないのだ。

私のような平民を気に止めるはずなのに、いつかあそこに捕われるのではないかと思つてしまう。

自意識過剰だと笑つてしまうのだが、どうしてもそんな思いが拭い去れない。

「ユーリちゃん、追加！ミレハのスープとカリトの炒めもの！」

「分かりました！母さん、ミレハのスープとカリトの炒めもの追加！」

「はいよ！サハニの炒めもの頼むよ！」

思い悩む事も朝の喧騒と共に消えていく。

というか悩む暇があれば、仕事をしなければ終わらない。

両親と私の三人で切り盛りする食堂は、安くて美味しいとご近所の中々評判で毎日が忙しいのだから。

くるくると目の回るような毎日だけど、こんな暖かな毎日が続くのだと私は疑い無く信じていた。

そう、食堂のドアから騎士様達が入ってくるまでは。

ボタンと勢いよく開いたドアに向かって、いらっしやいと告げようとした私は凍り付いたように固まった。

店のお客様も皆私同様に固まる。

ドアを開けて入ってきたのは、この食堂に不釣り合いなこの国の騎士様。

キラキラと銀色に輝く鎧と青いマントを身につけた見目麗しい三人の騎士様は、カツカツと私に近付いてくる。

そして、私の前に膝まづいた彼等はあるうことが私を姫と呼んだ。

一番前にいた紺色の髪の私の記憶が正しければ騎士団団長のクラウリス様が、恭しく私を見上げ口を開く。

「姫、お待たせしました。不埒な輩共から身を守るためとはいえ、ご苦勞をおかけし申し訳ありませんでした。ようやく全てが片付きました故にお迎えに上がりました」

何のことなのか分からず、私はただ途方にくれる。

私に、恐れ多くも騎士団長に姫呼ばわりされる筋合いなどなく、言われた言葉に思い当たることなど一つもない。

しんと、静まり返った食堂にごくりと唾を飲み込んだ音がやけに大

きく響き渡る。

震える声で私は、クラウリス様に答えた。

「な、何かの間違いではないでしょうか？わ、私はただの平民です！」

震える私を憐れみのまじった瞳でクラウリス様は見ながら、私の言葉を否定する。

「いいえ、ユーリ姫。私達は間違いなく貴方様をお迎えにきたのです。さあ、詳しくは城で話しましょう」

それだけ告げると、クラウリス様は私を軽々と所謂お姫様抱っこすると颯爽と食堂から立ち去った。

固まったまま、クラウリス様の肩越しに見たのは、青ざめた両親の顔。

ああ、もう二度と帰ってこれないのだと、それだけは何故か確信できた。

クラウリス様他2名の騎士様達は、豪華な馬車に私を入れると何も説明のないままにお城に連れて行った。

お城に着くと再びクラウリス様に抱き上げられ、湯殿に待ち受けていた女官達に手渡された。

手早く私の服を脱がし、体中を洗われたかと思えば、袖を通すのが恐ろしい上等なドレスを着せられた。

そして、再び待ち受けていたクラウリス様に抱き上げられ、城の中を進んでいく。

誰に尋ねても何も答えてくれず、ただ混乱して途方にくれる事しか私には出来なかった。

クラウリス様に下ろしてくれるように頼んでも首を振られるだけだった。

ようやくクラウリス様が足を止めたのは、扉の隅々にまで細工の施された一目で高価だと分かる扉の前。

扉の前にいた二人の衛兵にクラウリス様が声をかけると、おともなく扉が開いた。

その扉が私には地獄の扉に見え、怖くて怖くてただクラウリス様の服を握り締めることしか出来なかった。

クラウリス様は、無情にも私を部屋の中程まで運ぶとふかふかのクッションがおかれた華奢な椅子に私を降ろした。

そして、小さく「すまない」と謝れるとその意味を問う間もなく、クラウリス様は扉の外に姿を消してしまった。

カチャンと音がして、私はようやく部屋に閉じ込められたのだと気が付いた。

訳が分からず、逃げ道を探して部屋を見渡せばやけにその部屋が私好みである事に回らない頭でようやく気が付いた。

けれど、理由を知るよりも逃げ出す事を先決して、バルコニーに繋がる大きな硝子で出来たドアを開ける。

街が下に見え、さほど街から離れていない事に安堵しながら、逃げ出せないかと下を覗き込もうとした。

けれど、何もないはずなのにバルコニーのですりから外に体を持ち出す事が出来なかった。

まるで透明な壁があるかのように、私と外は隔てられていた。茫然とする私に、くつくつと笑い声が届く。

びくりと身体が震え、妙に懐かしい声に振り返ることも出来なかつ

た。

振り返ってしまえば、永遠にここから逃れられないと分かってしまったから。

一向に振り返らない怯えた私を笑い声の主が、後ろから抱きしめる。耳元で低めの甘い声は、確かに私を「姉さん」と呼んだ。

## 捕われる（後書き）

強すぎる愛着心と執着は、やがて愛しい人に死をもたらしただ。

目覚めたくなかった（前書き）

これくらいなら、多分大丈夫だと思うのですが、ちょっとエロい？



## 目覚めたくなかった

ゆっくりと意識が覚醒していく。

緩んだ頭は、いつもより遥かに心地好い布団を疑問にも思わず、更に眠るよう促してくる。

昨日は、あまり眠れなかったからもう少しだけ寝ようと決めて、布団に潜り込む。

暖かい枕に頬を擦り寄せれば、いい香りがしてくる。

うつとりと匂いを嗅いでいると、私の頭を撫でる感触がした。

「……………母、さん？もう少しだ、け」

そう呟いた私の体から、暖かな掛け布団が剥ぎ取られ、一気に寒くなり、暖かな枕にしがみつく。

……………暖かな、枕？

さすがに不思議に思う。

そういえば、いくらなんでも布団が柔らかすぎるような。

大体、私はいつ眠りについたんだっけ？

つらつらと未だにぼんやりとした頭で考える。

確か、昨日は食堂で働いていて、騎士様達が現れて！？

まさか、今居るのは、お城のベット！

ようやくそう思い至り、回りはじめた頭の中では逃げなきやという言葉だけがぐるぐると駆け巡る。

逃げなきやという思いは、無意識の内に暖かな枕……………と信じたい

……………から離れ背を向け距離をとるように促す。

逆らわずそれに従えば、

「起きたの？姉さん」

えっ！？

頭の上から聞こえたのは、くすりと笑みを孕んだ低めの甘い声。

私を姉さんなんて呼ぶ人物は、たった一人彼方しか思い当たらない。こっちでは、私は一人娘だったし。

でも、まさか、そんな筈は。

彼方まで、この世界に生まれ変わったの！？

さあと全身から血の気が引き、この訳の分からない状況を全てほうり投げて再び布団に潜り込み心地好い夢の世界に逃げ込みたくなる。

「ひゃっ！？」

「考えごと？ねえ、いい加減僕を見てくれないかな、姉さん。久しぶりに姉さんの温もりを味わるのは嬉しいけど」

怖くて顔を上げられずにいた私の体を、細くともしっかりと筋肉のついた男の人の腕が包み込み、背中に温もりが当たる。

待って。

何だか、やけにダイレクトに温もりを感じる気がする。

恐る恐る体を見れば、私は一糸纏わぬ姿だった。

更に体を包み込む腕にも背中に当たる感触も、服を纏っている感じではない。

まさか、は、裸同士で私は抱き着かれている訳？

慌てシートか何かを巻き付け体を隠そうとするが、未だに体を包み込む腕は緩くとも私を離そうとはしない。

どうしたらいいのか分からず、ただ逃れたい一心でジタバタともがく。

「ねえ、姉さん。こっちを向いてくれる？そしたら、はなしてあげ

るから」

少し焦れたような声にピタリと動きを止め、進まない気持ちを抑えてノロノロと向きを変え、上を見上げる。

見上げてみれば、それはそれは麗しい金髪に被われた顔がぱあっと嬉しそうに笑い、深海のように深い蒼色の瞳が細められる。

「か、彼方？」

悲鳴を何とか飲み込み、恐る恐る尋ねる。

答えなんて分かっているのに、一縷の望みに賭けてそう問わずにはいられなかった。

そう、例えば彼が色彩を除けば、彼方が成長すればこうなったんだろうという美麗な顔をしていても。

私を姉さんと呼んだとしても。

けれど、私の望みは彼の艶やかな声で打ち碎かれる。

「そうだよ。ああ、やっと姉さんに名前を呼んで貰えた」

彼は、彼方は否定どころか肯定し、私の体をぎゅっと強く強く抱きしめる。

息が出来ず、苦しくて苦しくてパクパクと喘ぎ、目に涙を浮かべた私にようやく気づいた彼方が力を緩める。

それに合わせて、必死に呼吸する。

新鮮な酸素を必死に取り入れていれば、ペロリと彼方は私の涙を舐めとる。

そればかりか私が固まったのをいい事に彼方は、私に口づけた。

「姉さんは、甘いね。本当は、もっと味わいたいけど、まずは食事

にしようか。約束は守らなきゃね」

それだけをわざわざ耳元で囁くと、彼方はやっと私の体を解放してくれた。

茫然と目だけで彼方を追えば、予想通り彼方の一糸纏わぬ姿が目に入ってしまい慌てて目を逸らす。

くすくすと笑いながら、彼方は部屋の椅子に置いてあつた服を身につける。

「姉さんの服もここに置いてあるから、早く着替えておいで。それとも、着せてあげようか？」

彼方の声に血の気の引いていた頬が一気に赤くなる。

くすくすと実に楽しそうな笑い声を残して、彼方はようやく部屋から出ていった。

目覚めたくなかった（後書き）

やっと手に入れた小鳥。

世界は、ようやく色を取り戻した。

**思い出と重なる今（前書き）**

お気に入り50件突破！

皆様ありがとうございます！

## 思い出と重なる今

彼方が出ていったドアを暫し眺める。

言い知れぬ恐怖がじわじわと込み上げ、叶うならばあの優しい両親の元に逃げだしたくて仕方がない。

けれど、私が今いるこの寝室には小さな窓しかなく、先程彼方が出ていったドアしか出口は見当たらない。

ノロノロと立ち上がり、彼方が指し示していった服を手にとる。

それは、意外な事にこのお城で女官達に無理矢理着せられた裾の長いドレスではなく、街でよく着ていたワンピースに良く似ていた。ただ、さらりとした服の布地や細かく施された刺繍が比べものにならない位高価な物である事を教えてくれる。

未練がましく他に服はないかと見回すが、有るはずもない。

可愛らしいその服に、普段であれば喜んだだろう。

けれど、今は自分で縫った服が恋しくて仕方がない。

進まぬ気持ちで、重く感じる服を身につけていく。

服は、私にピッタリでその事が余計気を重くする。

「彼方、どうして？」

込み上げてくる熱い塊で、喉が熱い。

あと一押し何かあれば、たやすく涙腺は壊れるだろう。

彼方は、私の可愛い可愛い大切な弟だった。

なのに、何故こんなにも彼方と再び対峙することが怖いのだろうか？  
もう二度と会えないと思っていた彼に会えたのに、私の中に喜びはなくただ恐怖ばかりが募る。

それが悲しくて、ついにぽろりと涙がこぼれる。

ぐいっといささか乱暴に涙を拭き取り、自分にかつを入れるように頬を叩く。

深呼吸を繰り返し、無理矢理に心を奮い立たせる。

きつと、私が何か勘違いをしてるだけなのだと自分に繰り返し言い聞かせ、幾分の躊躇いの後に震える手で、カチャリとドアを開ける。

ドアの向こうには、何が待っているのだろうか？

少なくとも自由でないことだけは、いかに馬鹿な私にもわかっていった。

「遅かったね、姉さん。うん、よく似合ってるよ、その服。気に入ってくれた？」

「……………彼方」

ドアの向こうでは、恐怖に怯える私とは裏腹に光に満ち足た部屋で何かを用意していた彼方が笑顔を向けてくる。

彼方の笑顔は、私が覚えているあの幼い笑顔を彷彿とさせた。

彼方に答える為に、ぎこちな笑みを浮かべる。

けれど、言葉なんて出て来なくてただ名前を呼ぶことしか出来なかった。

「どうしたの、姉さん。お腹が空いてるんじゃない？こっちに来て、座りなよ」

そういつて、彼方の準備が終わってもなお動かずにいた私をエスコートするように差し出された彼方の手。

私が覚えていたのは、まだ幼さが残る私の手にすっぽりと収まった



柔らかで小さな手。

けれど、今の彼方の手はよく手入れされ綺麗であるが、細かな傷がいくつか残っていて、私の手よりも大きく筋張っていた。それが、私と彼方との間に流れた年月を思い知らせた。

言葉もなく、ただ手を見つめる私に焦れたのか、彼方は私に近寄りびくりと震える私に構うことなく、きゅっと私の手をとった。そのまま、バルコニー近くに用意されたテーブルに私を導き、ふわりとした華奢な椅子に座らせる。

テーブルの上には、豪華な料理の数々が並べられていた。まだ、作り立てなのか料理からは湯気が立ち上っている。

それらを見つめながら、私の頭を過ぎるのは決して豪華ではないけれどたくさんの愛情が込められた両親の料理。

私が、二人の料理を再び口に出来る日は来るのだろうか？

そんな風に物思いに耽っていと目の前が滲んできた。

泣くまいと目を擦ろうとするが、彼方に両手を握って止められた。

「駄目だよ、姉さん。目が赤くなるよ」

そういつて顔を寄せてきた。

先程舐められた事が頭を過ぎり、思わず目をぎゅっと閉じるが幸い彼方は手にしていた柔らかな布で目元を拭うだけだった。

かつてと変わらない彼方の態度に警戒してしまった自分が恥ずかしくて、思わず俯いてしまいが何もされなかったことに安堵する。

やっぱりあの寝室での出来事は、私の勘違いにすぎないのだと。私は、ありもしない恐怖に捕われてしまっただけなのだと。

「あ、ありがとう、彼方」

だから、さっきよりも落ち着いた気持ちで笑顔を作り、礼を言う事が出来た。

すると、彼方は目を細め眩しそうに私を見て暫し動きを止めた。

疑問に思っても問い掛ける前に彼方は動き出し、目の前の椅子に座った。

「気にすることないよ、姉さん。それよりお腹が空いたでしょう。せっかく、作って貰ったんだから冷める前に食べよう」

彼方の促しに頷いて、並べられた料理を一口口にする。

現金なもので、口にしてみれば、自分がいかに空腹だったのかがわかった。

美味しい料理を口に運びながら、そういえば今はいつ頃だろうかと考える。

確かクラウリス様にお城に連れて来られのがまだ朝早くだったはず。それから、湯殿に入れられてこの部屋に連れて来られて気を失ったはず。

外はまだ明るいから、お昼過ぎかな。

私が窓から外を見ている事に気が付いたのか、同じように食事をしていて彼方が声を掛けてきた。

「どうしたの？ああ、今はお昼過ぎだよ。姉さんが気絶してたのは、3時間くらいかな」

「そう。あつ、そうだ！あつちのお母さんとお父さんは、私が死んだ後どうなったの？私、親孝行できなかったけど」

「うん。父さんも母さんも姉さんが死んだ時は悲しんでたけど、まあ元気で過ごしてたよ。ちゃんと老後の生活も見だし、孫も見せた。

大過なく過ごして寿命を全うしたよ」

「そう、彼方ありがとう」

彼方の言葉に、気にかかっていた前世の両親が幸せだった事に、親不孝をしてしまった身としてはほっとする。

ほっとすると、今度はまだ子供だった彼方の記憶しかなかったから、孫という言葉が気になった。

「待って、彼方、結婚したの！？そうだね、彼方だって大人になったんだよね。見たかったな。おめでとう！相手はどんな人だったの？」

どんな相手だって、彼方も幸せに過ごせたんだったら嬉しい。

だから、どうやって結婚に到ったのかとか子供は何人いたのかとか私が見ることの出来なかった、彼方の過ごした時間が聞きたかった。けれど、彼方は私の質問に不機嫌そうにし答えようとはしなかった。

「……………彼方？どうしたの？」

「何でもないよ。それより、姉さん覚えてる？あの家にいた猫のものごと」

「うん、覚えてるよ。ももがどうしたの？」

結局、私は私が居なくなってから彼方がどう過ごしてきたのか聞くことは出来ず、他の懐かしい話題に気をとられてしまった。

彼方と話す内に、並べられていた料理は綺麗に片付いた。

残すは、最後のデザートだけとなり、あの寝室での出来事が嘘みたいな優しい時間に私は愚かにも勘違いしてしまっていた。

彼方との誤解が解ければ、私はまた両親の元に戻ってあの暖かく優しい時間を再び過ごすことが出来るのだと。

最後に甘いフルーツタルトとともに出されたのは、懐かしい香りのミルクティー。

それは、私が大好きだった彼方の入れてくれたもの。

顔を上げれば、彼方にはにっこりと笑い、私にミルクティーを奨める。懐かしくてミルクティーを見ていれば、何を思ったのか彼方は口を開いた。

「大丈夫だよ、姉さん。それには、何も入ってないよ。冷めない内に飲んでよ」

思い出と重なる今（後書き）

君が考えるのは、僕のことだけ。  
そうなれば、僕は幸せなのに。

## すれ違う思い（前書き）

お気に入り350件突破、ありがとうございます。  
投稿が遅くなり申し訳ありませんでした。  
少しでも喜んでいただければ、幸いです。

## すれ違う思い

ピタリ、と凍り付くかのように動きが止まる。

さっきまでのあの暖かな時間が、一時の夢だと暗に告げる彼方の言葉で。

「……………これ、には？」

思わせぶりな彼方の言葉の意味なんてまったく知りたくないのに、気が付けば恐る恐る問い掛けてしまっていた。

彼方の言葉の意味を知ってしまったら、両親と過ごしたあの優しい時間は、もう二度と私の元には戻ってこないのに。

思い出すのは、優璃であった時、最後に飲んだ彼方のミルクティー。優しい香りとおんのり甘い、いつもとはほんの少しだけ違っていたあれ。

私は、目の前の懐かしいミルクティーを親の敵のように睨む。

ミルクティーに手を伸ばすことなど出来ず、ようやく視線を彼方に合わせる。

視線の先では、彼方がただにっこりと笑い、自ら入れたミルクティーを口にしていた。

まるでさっきの言葉に深い意味なんてないのだ、と言うように。だけど、彼方の深い蒼色の瞳だけは、ただ真っ直ぐに私を見つめていた。

真実を知ることには怯える私が、このまま真実から目を逸らし続ける

ことを赦さない、と告げるように。

いまだに頭は混乱したままで、何もかも忘れて眠ってしまいたいし、彼方の元から逃げ出したいと思ってしまう。

だけど、私を見つめる彼方の瞳の奥底、きっと前世で彼と一緒に過ごしてきた私だから分かる微かな悲しみと怒りに気づいてしまった。気付いてしまえば、逃げる道など選べない。

だって、やっぱり彼方は私にとって可愛い弟なのだ。

だから、彼方には笑っていて欲しいし、幸せになって欲しいと願ってしまう。

その為には、真実から目を逸らし逃げるわけには行かないのだ。

一度、目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をする。

そして、改めて開いた目の先に居るのは、私が心を決めるまでただ黙って見つめていた彼方。

その様子が、かつて私を見ていたあの幼い顔と重なる。

私は、彼方のお姉ちゃんなんだ。かつて、幼い彼に依存してしまっただ、情けないお姉ちゃんだけど、だからこそ、今ここで向き合わなきゃ、お姉ちゃんなんて名乗れなくなる。

そう改めて思う私は、知らなかった。

彼方にとって、私は姉であって姉でなかったことを。

「……………彼方、どういう意味？」

それでも、あれだけ決心してようやく絞り出せた声は情けないことに震えていた。

ようやく真実と向き合う気になった私を楽しそうに見つめながらミ



ルクティーを飲み干した彼方は、すぐに答えなかった。  
彼は、逆に私に実に楽しそうに問い掛けてきた。

「ねえ、姉さん。姉さんは、何で死んだんだって思う？」

それは、確かにあの眠れない夜がくる度に思っていたこと。

眠ることを恐れてしまう自分が情けなくて、恐れを克服する為に叶わぬ願いと知りながら、知りたいと願っていた。

だから、彼方の言葉は前世に踏ん切りをつける為には、好都合のはずだ。

なのに、今は知りたくないと言を塞いでしまいたい気持ちになってしまう。

そんな情けない自分を、真実と向き合うと決めたのだから逃げるな！、と叱咤激励する。

「あの時の姉さんには、死に到る病も怪我もなく全くの健康体だった。あの日は、僕と一緒に眠ったんだから、事故に遭うはずもないもし、火事や地震があったなら、僕も一緒に死んでる。だけど、僕は死なずに寿命を全うした」

何故だと思う？

問い掛ける彼方の言葉から、何か突発的な事故が起きた可能性はないのだと分かる。

でも、そうなるに残された可能性は、本当にあのミルクティーだけになっってしまう。

そして、それは彼方が私の死に関わっていたということだ。

私は、彼方にそれ程嫌われていたのかと悲しくなる。

いや、前世の私は、今と変わらず平凡な少女だった。

何事も人並みか、時には人並み以下だった私は、彼方に見れば、恥ずかしく情けない姉だったに決まっている。

しかも、彼を支えるどころか、依存してる部分もあったのだ。

愚痴も文句も我が儘だつて、彼に言っていたし、モテるところか彼氏のかの字もなかった。

彼方みたいな優秀で天が二物も三物も与えたような彼の姉という立場は、私にはまったく不釣り合いだった。

周囲の人々にも散々言われていたのに、私は彼方の優しさに甘えていたのだ。

確かに、嫌気が指してしまったことだろう。

だけど、まさか彼方が殺したくなる程私を嫌っていたとは、露とも思っていなかった。

あの可愛い可愛い彼方に、人殺しをさせてしまったことがひどく申し訳なかった。

彼方は、優しくて我慢強い子だったから、たくさん我慢してくれていたのだろう。

もっと、早くに私が気付いて彼から離れていれば、彼方に罪を犯させる事はなかったのに。

そう思えば、恨みなどかけらもなく、ひたすらに後悔ばかりが湧いてくる。

「ごめんね、彼方」

謝っても仕方がないと分かりながら、それしか私は口に出来なかった。

本当にごめんね、彼方。私が、姉でなければ、罪も犯さずにすんだはずなのに。

何で、私達は姉弟だったんだろうね。

もっと素晴らしい人が彼方の姉であれば、誰も苦しまなかったのに。

「それは、何に対する謝罪？」

さっきまでの楽しそうな顔から、一変して不機嫌な顔になった彼方に更に申し訳なくなる。

「彼方、本当にごめんね。私がつと早く彼方の気持ちに気付いてあげれたら、彼方に罪を犯させる事なかったのに。私なんかが姉だったから、彼方を苦しめたんだよね」

「……………そうだね。確かに姉さんが姉さんだったから、僕は苦しんだし悩んだよ。姉さんが謝ってるのとは、違う意味だね」

ますます不機嫌になりながら、それでも、私を姉と呼んでくれる彼方の優しさに余計情けなくなる。

ただ、最後の言葉の意味が分からず首を傾げた。

すれ違う思い（後書き）

鳥かこの小鳥は、いまだこの思いを知らず。  
愛しい小鳥の止まり木は、かつては僕だけだったのに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7670r/>

---

鳥かごの小鳥

2011年8月19日22時49分発行